馬耳東風

獣害対策あの手この手の昨今，天敵頂点に立つオオカミへの助っ人願望が遂に「スーパーモンスターウルフ」やタカの旋回で野鳥を威嚇する「かかしロボット」を誕生させた．前者は太陽光発電でバッテリー駆動し，動物を感知すると，首を振り，目はオレンジ色に光り，オオカミの声や銃声，犬の鳴き声，人の声など大きな音が流れてくる．後者は果樹園の「番鳥」として威力を発揮する．どちらも近代化された案山子（かかし）のロボットだ．害獣対策にはオオカミを，害鳥対策にはタカをモデルにしている．天敵ロボットの登場だ．農作物や山林の被害が数値化されるとともに，人口減少に見舞われる農山村の過疎化は急ピッチで進行し，生活環境の悪化は地場産業に陰を落としている．結果，棄てられ所有者不明土地が増加し，大量相続時代の国家的課題として提起されている．

アライグマやハクビシンが都市にも侵略的に侵入し，環境に適合して我が物顔で生息している．かつて佐久間勇次日大名誉教授は，生態保全の必要性と農林業被害を避け食料自給率の向上のため，天敵としてのオオカミの導入を唱えた．アメリカの事例をあげて，雄だけをワクチン接種と去勢をして導入しようとするものである（武蔵野ペン138号）．当時は笑い話であったが，ついにロボットが出現したのだ．

天敵不在の結果，猟師の猟銃と箱罠（はこわな）や括（くく）りが行われているが，猟銃免許者は確実に高齢化し，厳しい山追いの現実がある．イノシシ，シカ，クマ，サル，カモシカ，アナグマ，タヌキ，キツネ，ノウサギと生活圏に侵入のアライグマやハクビシン，地域によっては逃亡動物と，その対応の仕方もさまざまである．鳥獣の過剰分布が引き起こす有害問題は，産業被害にとどまらず感染症からの安全性も十分に検討されなければならない．

ニホンオオカミは明治38年（1905）に奈良県の東吉野村での捕獲を最後にその後の生息が確認されず，やや大型のエゾオオカミも明治半ばに絶滅したとされている．ニホンオオカミの若い雄の遺体は，イギリスから派遣の東亜動物学探検隊員によって買い取られ，今も大英自然史博物館に丁重に標本保存されている．東吉野村は昭和63年（1988）ブロンズで「ニホンオオカミの像」を建立した．現存する国内３体の剝製は年月の経過を感じさせるが，この等身大のブロンズ像の天に向かって台高の山野を遠吠えする若い雄オオカミの雄姿は，口先がとがり耳は立ち，肢は長く尾は垂れ軽快な痩せ型である．まさに往時の魂を呼び起こす容姿で刻まれ，文化史を彩る遺産として関心を呼んでいる．オオカミの立派な夢の手作り絵本も公募出版され好評だ．また，秩父多摩地方では神様の眷属（けんぞく）として祭られ，お犬様のお札やお祓（はら）いもある．戌年（いぬどし）の本年は，犬の首輪にお守りをつける向きも多そうだ．踏切事故の防止に「シカ踏切」を設置した関西の私鉄路線は，コジカがひかれて母シカが40分も離れなかった悲惨な現場を見た職員の発案によるそうだ．ロボットによる天敵再現が侵入防止を図るか，鉄道や高速道の動物を守る専用通路の愛護の取り組みとともに智恵の出しどころである．

（柏）